

ロゲイニング形式で行われた サンスーシ大会

編集部

春うららの神奈川県秦野弘法山でロゲイニング大会が開催された。オリエンテーリング界におけるロゲイニングの活用方法について、一つのモデルを与えてくれた本大会をレポートする。

大会概要

丹沢山塊の麓、秦野弘法山でサンスーシ主催ロゲイニング大会が開催された。周囲を市街地に囲まれた場所とは思えないのどかな里山風景の中を、約200人がうらかな春の一日を楽しんだ。男子個人の優勝は「ロゲイニングの帝王」こと柳下大。主催者が「満点は出ないように設定しました」という事前の情報に挑戦する果敢な走り、制限時間を30分近く余らせての満点は見事。

一方混合組では、村越・田島組と伊藤・芝田組が優勝を争うと見られたが、柔軟な作戦で時間を有効に使いきった村越・田島組が満点まで一つを残す好パフォーマンスで、優勝した。

オリエンテーリング大会としてのロゲイニング

ロゲイニングは2008年にシリーズ戦が始まり、運営者のほとんどはオリエンテーリング関係者である。しかし、今回のように、オリエンテーリングクラブが、クラブの中心的オリエンテーリング行事をロゲイニング形式で開催することは珍しい。サンスーシはどのような意図を持って、このロゲイニング大会を開催したのだろうか。主催者の中心にいる大場氏、尾上氏にインタビューした。

- Q. サンスーシ大会を今回ロゲイニングにしたのはどのような理由からでしょうか？
- A. 秦野弘法山のパーマネントコースの地図が古くなり作り直しが必要で、それに伴って記念イベントを開催したかったからです。しかし、あのテラインでは質の高いオリエンテーリング大会が開けないので、ロゲイニング大会にしました。クラブ員の中にロゲイニング愛好者もい

たことも決めた要因になっています。

首都圏近郊においては、良質なトレインを確保することは容易ではない。しかし、通常のオリエンテーリングでは、どうしても良質なトレインとコースが大会の質を大きく左右する。一方ロゲイニングでは、そのあたりが比較的自由だ。それが大きな決め手だったようだ。

また「気軽に運営できること。やはり地図調査やコースセットの神経の使い方は違います。運営者も少なくても済みます。」ポイントオリエンテーリングの大会では、10を越えるコースの設定、そしてその地図の管理など、運営に対する負荷は大きい。容易さも開催の決め手になっていたようだ。

- Q. ロゲイニング大会を行う上で、オリエンテーリングとの運営の違いはありましたか？
- A. ほとんど違っていません。あえて言うなら、賞品をふんだんに用意したことでしょうか。かなりお金をかけました。

その一方で、地図作製には意外と時間がかかった。「全面的にGPSを使った調査のやり直しと、R246の北の部分の追加などロゲイニング大会用の地図としては、かなりの時間がかかりました。」もっともそのおかげで、参加者は安心して走り回ることができた。

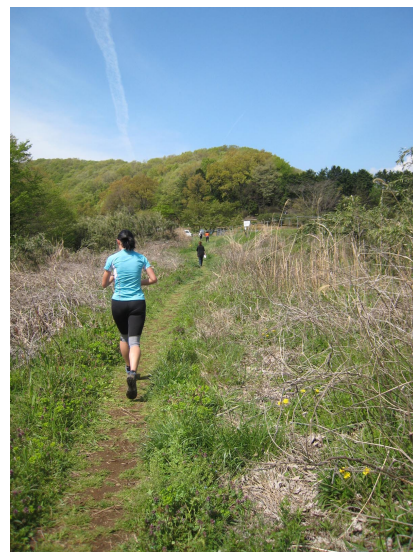
一方、尾上氏は、技術的な面の違いを強調する。

「日本のロゲイニングは、本格的なものとは違い6時間、3時間というような小規模なものなので、見た目はスコアオリエンテーリングと似ている。でも以下の点で大きな違いがある。

オリエンテーリングは（スコアでも）、地図上のすべての情報を活用してのナビゲーションに重点があり、それが楽しみでもある。そのためにコントロールは比較的難しい場所に置かれることが多い。一方ロゲイニングは、数多くあるコントロールをどの順に回るかとか、どれを捨てるかといった作戦面に面白みがある。そこに集中するために、コントロールは、ほとんど道をたどれば行けるような簡単な場所に置くということを意識した。コントロールを道

から外さなかったことで、山歩きだけをしていたような初めての人にも、全く無理のない範囲での新たな楽しみとして受け取ってもらえたかなという点です。」

オリエンテーリングへの門戸を広げるためにも、オリエンテーリングコースとの違いを意識することが重要なようだ。



▲のどかな里山を走る、サンスーシオリエンテーリング大会（ロゲイニング形式）

- Q. ロゲイニングでは、一般に非オリエンティア率が高いと言われていたますが、サンスーシではどうだったのでしょうか？
- A. オリエンティアの数は大体、グループクラスでは6（26チーム中）、個人クラスでは（約40/91名中）か、もっと多いくらい、初心者では7（23チーム中）でした。

これを見ると、個人クラスにオリエンティアが多い。それでも人数で言えば6割以上がいわゆる「非オリエンティア」だ。トレイルランニングでは著名な鈴木博子さんも、地元ということで参加していた。初級者には敷居の高い印象のあるオリエンテーリングと一般アウトドア活動者の接点としてロゲイニングが機能することが、オリエンテーリング界全体にとっても望ましいことだろう。もっとも大場さんは、「やはりオリエンティアとしては、オリエンテーリングを運営したいという意識があります。でも来年もやりそうなムードです。」と語っていた。

上位選手のコメントより

本大会では、まだまだ初級者に対するステップアップの機会を提供しようという意図で、レース後のルート・戦略紹介の場が設けられた。一斉スタート一斉ゴールのロゲイニングなら、より多くの人が時間的に無理なく、こうした場に参加できる。主催者にとっても、表彰までの時間つなぎになる。50名以上の人が熱心に聞いていたのが印象的であった。

個人男子で優勝した柳下、混合組優勝の村越・田島がそれぞれのルート・戦略を紹介した。以下では混合優勝の村越・田島のコメントを紹介する。なおルートについての画像は以下のURLに掲載してある。

<http://www4.plala.or.jp/sans-souci/event/taikai28/index.html>

TEAM 阿闍梨の村越・田島組は、男子も含めた全体でも3位になる好成績で混合組を制した。満点にあと1コントロールの1969点である。

「まず、最初にトレインの大きさから全体をまんべんなく回ることにはできるだろう。同時に、3つの隅のエリアのどこにも得点の高いコントロールがあるので、高得点のためにはまんべんなく回る必要がある。東端の180は魅力的だが、周辺には他のコントロールがないので、とりにいかななくてもいいかなと、最初の時点では思いました。あとから思うとこの時点で縮尺のマジックに陥っていましたね。」この日の縮尺は1:10000。通常ロゲイニングで使うのは1:25000が多い。地図で感じたほどに距離がないことを直感的に把握で

きていなかった。

「南から北東の一番高いエリア、最後に中央から東に伸びる尾根に戻ってきて、時間の限り取る。南側が1時間強、そして北のエリアが1時間で終わり、残り1時間でとれる限り取る。そんな読みでスタートしました。」

「弘法山の山頂で、ちょうど30分でした。あ、なんか思ったよりも回れる。パートナーの田島はいつもより体調が悪くペースが上がらないけど、それでも、思うよりも早くこれしてしまうんですね。時間を無駄に余らせられないような周り方が必要かもしれない、そう思い始めましたね。」

「一番北の端にある48を取った時、83分だったんですね。正直、これやばいぞって(笑)。うまく回らないと、時間は残ったのに、もう残ったコントロールは取りにいけない。このころは登りを利用して、基本的には出戻りになる中央部のクリアの方法ばかり考えていました。でも、中央から東に至る。120とか49とか70をあまりきれいにとれない。この時もう一つ悩んでいたのは、31、32。かなり回り道で、登りもある北エリアのコントロールをとるべきかでした。僕の見込みでは、これまでの移動距離や登りを考えると、たとえ後半ペースダウンでも間違いなく時間があまっちゃう。だからといって、このエリアにもどってくる時間はない。これは攻めるべきだろうと。」

村越は、第一の懸案の解決方法に思い至り、田島に提案する。それは、最低限のCPをとって一番東の180に直行し、時間の許す限り中央部に戻りな

がら、CPをゲットするという大きな作戦変更だった。「中央部の尾根線からは、だいたいどこにいても約15分以内に戻ることができる。こうすれば、残り時間を見ながら、中央部の出戻りコントロールを一つずつ採って、時間の無駄なく回れるんです。」実は、田島も同じ時期に同じことを考えていた。この意見の一致に力を得て、村越は本題を切り出す。「ねえ、31、32も回らない？」もちろん、決断を切り出す前に、納得材料を小出しにしていた。

田島は、「悪いコンディションとそこから引きおこすマイナス思考の私に、ただ心情的にがんばれ！大丈夫だまだまだいける！と励ますのでなく、根拠ある数字をいつでも言って納得させて励まし、先に進ませてくれた。例えば、300m進んでその間に5本の等高線登るのに7分でカバーできてるよ、とか。自分もメインナビゲーターをしていたら同じことを言うだろうが、それ聞いてげっそりながらも納得でした」という。このあたりのコミュニケーションの良さが、村越・田島組の成功のポイントと言えそうだ。

最終的には、東端の180から中央部に戻り、最大期待値のコントロールまで周り、41のみを残してゴールすることができた。100から下ってきた段階でほぼ同じ位置にいた伊藤・芝田は村越・田島の動きを感じながらも31、32をパス。レース後伊藤は、「32-31を取らなかったのは、自分達の力の見誤り。終盤に尾根依いに時間調整という案が出なかったのはうちらっぽい頭の課題。余ってしまった25分で34をピストンしたのはチームならではのロマンで面白かった。初チームならではの課題と面白さのあるレースでした。菅平12時間で混合優勝を狙おう！」と、リベンジを誓った。

一方田島は、「全体で3位というのがとても嬉しい。3時間、約22km、アップ1090mはよく最後まで走った。11月にニュージーランドで行われるロゲイニング世界選手権ではさらにブラッシュアップ、チーム力をアップしていき、本戦に望みたい。」と結んだ。



▲地元に住むトレイルランナーの鈴木博子さん(右)とすれ違う(左は田島)



▲満点柳下のルート

トップ選手はどう走るか？ 「帝王」柳下の戦略

柳下 大

今回の弘法山ロゲインはコース設定者の想定を覆し、30分余らせて満点を取ることができた。その作戦と戦略について書いてみたい。



レース後のルート解説をする柳下大選手

実は、事前にレースのための研究はほとんど行なっていなかった。しかし、弘法山周辺は丹沢の末端に位置し、平地からいきなり急峻な尾根やピークが連立している地形ということは知っていた。弘法山は標高 250m 弱で、山麓からの比高は 150m 程度。また、善波峠を越えて大山へと連なる尾根も、おそらくエリアに含まれるのは標高 500m 程度までと思われる。よって最大の高差で 400m 程度と予測していた。もちろんこの尾根を登ったり降りたりのコースとなるだろうが、これぐらいは3時間ロゲインとしてはごく標準的なフィールドともいえるだろう。

会場にはサンプルの地図が張り出されており、縮尺が 1/10000 であること A3 であることを知った。3時間のロゲインは 1/25000 の A4、もしくは 1/15000 の A3 で行われることが多く、これだと通常少し取りきれないぐらいになる。今回のように A3 で 1/10000 だとエリアの面積はこれらの半分弱である。高低差がそれなりにあるとはいえ小道も発達した里山であり、この時点で全部取れるのでは、という推測がたった。

そして地図が配られ、ざっとコントロールを確認すると特別困難な位置

にはなかったのも、想定どおり全部まわる作戦で考える。しかし、一筆書きにしようとするとなかなか難しい。41, 43 をどのタイミングで取れば効率的なのかぱっと見て判断がつかなかった。ならば、最初に 41 or 43 を取る案も浮かんだが、奇策のような気がしたので取りやめた。結果、考える猶豫の大きい北東部から網羅的に取っていく作戦にした。

走り出して最初は 180 に向かうつもりだったが、33 を経由することにした。これはコントロールを取らずに走る区間が長いのは効率的でなく、こまめに取ったほうがよいと感じたのと、意外とスタート直後脚が軽く登りが苦にならない気がしたからである。

今回気づいたことだが、ロゲインは通常終盤のまとめかたが重要になるが、パーフェクトを狙う場合むしろ序盤が大事になる。取りこぼしはしてはならないし、中盤以降はきれいな一本道に仕上げていくための布石作りにならなければならない。

今回その大事な序盤は、アップダウンの多い回り方であったし、47-45 のショートカットでできなかったこともあり、正しいのかどうか半信半疑だった。その不安を取り除くために何度も地図を見て後半の展開を考え、42 を取って国道をくぐった時点で、それ以降のいい流れが浮かびあがってきた。41, 43 も処理できる見事なルート取りだ。これで序盤の取り方は悪くなかったと自分を納得させることができた。あとは基本的なナビゲーションと、頑張ることに専念できる。

そうするとライバルとのタイム比較も気になってくる。強敵は紺野選手と許田選手である。100 を取った後、48 から降りてくる許田選手と鞍部の果樹園付近ですれ違った。おそらく南部のエリアに序盤で行っているはず。網羅していれば押され気味、残しがあると彼は終盤難しくなる。両方の可能性を想定する。その後逆方向からくる有力選手ともすれ違い始める。村越さんからは「パーフェクト狙いだろ？」と聞かれる。と、いうことはりかさんとの混合チームの村越さんもパーフェクトを意識しているということになる。つまり余裕をもってパーフェクトを取らないと個人男子では勝てない。2時間半の攻防と想定する。後半はきつかったがその想定タイムに向

けて何とか耐える。2時間半にはわずかに及ばなかったが全部取ってゴール。会場に戻ると既に紺野選手がいて負けたかと思ったが、彼は見落としがあり全部取れていなく優勝が確定した。

私自身 30 分余っていることから、満点獲得者がもって出るかと思ったが、結局一人だけだった。これは、事前に満点を狙う想定ができたかどうかの差だと思う。また、時間を余らせた参加者が多かった気がする。これは会場付近にコントロールがなく、時間調節ができない設定だったためだろう。このあたりも計算に入れた作戦が必要で、コントロール位置設定によっても臨機応変の戦略が必要になるのも、ロゲインの奥深さだと感じた。

なお、装備は空身でもよいかと思ったが、日差しが強く気温があがりそうだったので、ハイドレーションを背負いコーラを 500ml 入れた。食べ物はジェルを一つ。3時間の場合、気候により飲み物の量が大きく変化するので、特にこれからの暑い時期でのロゲインでは重要なポイントとなるだろう。飲み物の量も適切で、新緑のなか爽やかに走り抜けることができたロゲインだった。

(柳下 大)